

# 全体討議

まとめ及び司会 上田 閑照

上田閑照 この最後の時間はまとめということになっておりまして、いつの頃からか私がまとめをすることになっておりますが、今回はこの時間にまず自由研究発表の時間を取りましたので、いつもより少し時間は短いのです。私もできるだけ簡単に話をしたいと思っています。

昨年の集まりの時の大きなテーマは、霊性・自然・自己だったと思います。自己をめぐってユングの問題などがでてくるし、霊性に即しては鈴木大拙の霊性的自覚などが出されました。

それで、この前の最後の時に奥村さんが出してくださいったんですが、霊性という言葉の意味するものをどのように活性化するかが私たちの問題であると仰しゃって、八木重吉の『草に すわる』という詩を仰しゃってくださいました。それを読みます。

「わたしの まちがひだった  
わたしの まちがひだった

こうして 草にすわれば それがわかる」

私たちが霊性という言葉で考えようとしてきたこと、考えきたことが直接に感じられるところがここにあるのではないかと。そういうことで、もう一度この詩から出発してみたいと思います。それで面白いことには、大拙先生の霊性について話をしてくださいました堀尾さんのご発表の中に大拙からの引用があつて、こういう言葉なのです。「霊性の奥の院は実には大地の座にある」大地に座ってそこに霊性の座がある、と。もちろん八木重吉の「草にすわれば」とは大地に座っている、草に座ってそこで感じていることですね。そういうふうにして初めて解るまちがいという事がある。これは、あれこれのことをしてすぐまちがいだったと思える、そういうまちがいは違うと思います。大地に、草に座って初めて座っている自分の存在そのもののまちがいが感じられている。そのときには既にそういう風を感じさせる、草に座る、大地に座る、そういうことがある。そこで、自分が大地に座っている、草

に座っているとしてみても、その全体の空気というか、靈性というのとはそれだと思ふのですね。空気でははっきりしないといふれば、そこでおそらく感じられているであろう風、それは直接には草のゆれで表現されているけれども、座っていると、そういうところで感じられているものですね。それを感ずるのは、昨日小野寺さんが使った言葉で言うところの靈性という言葉で特に言いたいものは、地表の風ではなくて大地の息吹みたいなね、そういうものとして風、しかし単に大地の息吹というものではなくて（図を書いて）これが大地で草が生えていて、ここに座っている。この時には、彼・草・大地が一つという事態だと思ひます。大地の息吹という言葉を使うとすれば、単に大地が呼吸しているということではなくて、ここは普通に言えば虚空、空気、空と言つていいと思ひますが、それが大地に浸透している、虚空に浸透された大地の浸透される動きみたいなもの、それがここでいう風だと思ひます。それを靈性という、と。すると靈性とはこの全体ですね。彼・大地それを包む虚空、それが一つになった、その一つと、このところで動くもの。これは昨日の花岡さんの言葉でいうと「自己・自然・超越」が一つということ、その一つが透明になってという言葉が使われて、そこで働きたいということが言われました。透明というの、その一が硬い一として全体を占めているというのではなくて、その一自身が虚空に向かつて透明になっている、そこを絶対無という言葉で言っ

てもおかしくはない。ただ、それは動かないものではなく、全体に、大地に浸透し、それが大地の息吹となって風となつて、ここでは八木重吉に浸透している、と。そこで彼はまちがいがいだったということが解る。しかし、解つた時には既にまちがいがいだった自分とそういうことが解つている自分、分かっている自分は単なる自分ではない、この全体の自分ですから。ここで八木重吉はある意味で二重になっています。この八木重吉とこの全体ですね。おそらく八木重吉ならぬ八木誠一さんが言おうとされたこと、「自己・自我」もこの事態になると思ひます。この全体がここでつかまれるとき「自己」です。「我」と言つてもいいが、それは「我ならぬ我」と言うべきですね。「我ならぬ我」それが「自己」である。「自己」というときには既に「自己ならざる自己」という事である。

「我」が「我だけの我」になった時、それが八木さんの言葉で言えば「自我」。ただこの「自己」と「自我」は分析的に考えられるとき、私が昨日質問したような問題が出ると思ひます。そしてこの「自己・自我」の「・」はこの全体を一つに貫くような、「・」を打つことで全体にいわば、風穴が開いて全体が通ずるようなものとして考えることができる。そこを秋月さんの言葉では「一息に」ということだと思ひます。

さっき末法どころか終法ではないかということもあつたし、また宗教が妥当性を失つていることもあるし。靈性は、さし

あたり仏教とキリスト教を統合するものとして積極的に出てくるものではなくて、もう一度宗教という言葉で言われていたあり方を掴み直すという時、どこから見るかという、そこを示唆する言葉として意味を持ってくるのではないか。そして靈性の現実は何かという、むしろ靈性が欠けた場合どうなるか、これが我々が現に経験していること。末法の時には親鸞のような信仰の形態が出てきます。終法だとすれば、しかし終法でよいかと言うと、おそらくよいと簡単には言えない。あるいは、終法でよいとすればそう言えるということ自身が新しい生き方になって、そこに何か積極的なものがないければならない。そういうことを考えた場合、靈性ということが新しい出発点になり得る。なぜかという、現に与えられている我々の現実そのものが、まさに靈性の欠如の徹底したあり方だからだ、と。これがネガなんですね。そこから見通せるもの、これは今までの宗教の言葉、それがそのままリアリティを持って妥当するということではなくて、もう一度大本から掴み直す、と。靈性とは人間のある存在の次元でもあるけれども、単に人間の次元ではなくて存在するもの全ての次元ですよ。

一応、靈性がどういう仕方の問題になるか、そして靈性を私たちに感じさせてくれるものは直接に宗教の言葉ではなくて、八木重吉のああいう詩ですね。これはむろん他にもいろいろあると思います。

これで終わります。それでは、お一人ずつご意見やご感想をお願い致します。(出席者の意見・感想 省略)

全体を通じて、靈性という言葉使いを巡る問題がいろいろと出されたと思います。靈性という言葉でいいかどうか。靈性という言葉は、宗教を掴み直す時の一種の作業仮説のようなものとして使われる。どうして宗教を掴み直す必然性、要求があるかということには、いろいろな現実の実際の状態があります。極端に言えば、宗教そのものがある問題を起こしているという事態がある。だから宗教をどう見るかという場合に、改めて従来の宗教が自分で使っている言葉ではない新しい見方が要求されてくる。また逆にいえば、仏教、キリスト教のような伝統宗教は、もう一度宗教といわれたことを自分の中で活性化できる、それが同時に社会の事柄になるという場合にどういふ言葉で自分を掴み直すか、という要求があると思います。だからといって、それによって欠落するものがあるては困る。例えば今まで宗教という言葉で触れてきた重さといったことなど。また、靈性ということが伝統的な宗教を無意味にするということではないし、靈性によって宗教を掴み直すという時そういうことが意図されているわけでもない。従来の宗教を活性化するためにどこからというね、その新しい原点を見出すという事で、しかもその原点は単なる宗教概念の問題ではなくて何か直接に実存に響く言葉が、ハイデッガーの言う意味での実存的・実存論的な言葉が要求

されていると思います。そういうことで靈性という言葉が試みとして出されてきました。従来いわれた宗教心とか宗教性という言葉はそのまま響くという事態ではなくなっている。

靈性という言葉が持ついやなイメージ、それは靈という言葉にまつわるものではないかと思えます。先ほどの堀尾さんの文章の中に大拙先生の言葉が引用されているのですが「靈性と云って、そんなものが、どこに存在するわけではないが、その動きが感ぜられるので、すべて話しの場合のよいように、靈性と云うのである」感じられない人には感じられないのですよね。感じられるのは小野寺さんの言う意味での感性ですね。靈性というものは、在るとした場合、それが悪い意味での靈です。在るものではない、ここが非常に大切なことだと思えます。感じられるということ。草の上に座って感じられること。八木重吉にとってあれ以外の感じ方はなかったのですね。悲しみということも、違ったことではないと思えます。もう一度言えば、どこから実存的・実存論的な言葉が得られてくるかということで、靈性という言葉がその一つの試みとして次第に使われてきたということですね。靈性という言葉自身には、例えば悪靈という言葉はありますね、悪い靈性という言葉はないんじゃないか、と。

生活ということも、大拙先生がこういうことを言われています。先の「・」のことね、あれを伝統的な言葉で即ということから、堀尾さんがパラフレーズしたところですが『即』の

『はたらき』としての『靈性』とは人の生活にんの事である」これも大拙が強調したことですね。そこでは矛盾がなくなるということではなくて、「矛盾はそのまま残されておる。併し残された矛盾は始めの矛盾ではない」そこに本当に見えるか見えないほどの違いがある。それは、自分が生きているというそこではっきりする違いであって、外から見たら見えないう、それが自分で見えなくなったとき靈性が靈になる。靈性という言葉にはいろいろな問題がまわりついているから、それを考えていくためにも次の集まりのテーマは「自然」に。そういうわけで、また来年お会いすることにしましょう。